6歳のときにヒマラヤを越えて、チベットから亡命した少年の物語。

www.olo-tibet.com ©OLO Production Committee

「オロ」を見終わった時、何だかスキップしたいほどの嬉しさで胸がいっぱいでした。故郷を追われ、家族から遠く離なれた人たちが、こんなにも明るく、こんなにも愛に満ちて生きている！ チベットの人たちが祖国を離れながらも守っている祈りの世界、生活の中の歌や踊りや物語りする姿が、心に沁みるほど、ひたむきで、美しかった！ 東日本大震災でたくさんのものをなくした今の私たちが、一番求めているものがここにある！ 被災地の人たちにぜひ見てほしい映画です。

加藤登紀子（歌手）

オロ

OLO.The boy from Tibet

おちゃめな少年と
アバンギャルドな老監督が紡ぎ出す、
チベット望郷の詩。

どんな時代、どんな民族も、おとなはこどもに未来を託してきました。受難がつづくチベット(注1)も例外ではありません。「しっかり勉強するんだよ」と母親に背中を押され、この映画の主人公オロがチベットから亡命したのは6歳のとき。いまはインド北部の町ダラムサラで、チベット亡命政府が運営するチベット子ども村(注2)に寄宿し、学んでいます。「なぜ母はぼくを旅立たせたのだろうか」。自力でその答え=生きる道を探し求めるオロの姿を一台のキャメラが撮影しつづけました。

監督は岩波映画出身の岩佐寿弥。土本典昭、羽仁進、黒木和雄の演出助手を経て、1960年代後半から70年代にかけて、映画の常識を覆すアバンギャルドな作品を連発したことで知られます。本作でも主人公の少年と監督自身をまるで“孫とおじいちゃん”のように画面に登場させるなど、その自由な精神は77歳になったいまもまったく変わりません。

「映画の着手から完成までの3年間に、ぼくのなかでオロは〈チベットの少年〉という枠をこえて、地球上のすべての少年を象徴するまでに変容していった」——岩佐寿弥

映画の最後でオロは「それでも、ぼくは歩いていく」と決意します。現在のチベットをめぐる状況は、どんな時代、どんな民族と比較しても格別に悲しい。しかし、悲しみを乗りこえてオロがたどりつく決意は、21世紀という多難な時代を生きる「地球上のすべての少年」に共通するものです。チベットの少年と日本の老監督が紡ぎ出すこの望郷の詩は、暗闇に立つ一本のろうそくのように、私たちのこころに“生きる希望”を灯してくれます。

注1) 受難がつづくチベット
ヒマラヤ山脈の北側に広がる「世界の屋根」に存在したチベットは、いまは中国の一部になっている。1959年に指導者ダライ・ラマ14世が亡命、インド北部のダラムサラにチベット亡命政府を樹立した。現在のチベット難民数はインド・ネパールを中心に全世界で約15万人と言われている。

注2) チベット子ども村
Tibetan Children's Villages(略称 TCV)。中国で危機に瀕するチベット語、チベット文化の教育機会をこどもたちに与えたいというダライ・ラマ14世の意向で1960年に設立された。現在はインド各地で7校が運営され、約15,000人が学んでいる。

監督:岩佐寿弥　プロデューサー:代島治彦　撮影:津村和比古　音楽:大友良英　絵・題字:下田昌克　編集:代島治彦
整音:滝澤 修　通訳・コーディネーター:ツェワン・ギャルツェン　ポランチ:南 椌椌　制作・配給:スコブル工房　企画・製作:オロ製作委員会

2012年／108分／日本／チベット語・日本語／HD／カラー・ステレオ／日本語字幕付き

5月3日(金)祝日『オロ』上映会inえずこホール(大河原町) 岩佐寿弥監督来場!

12:30開場/13:00映画上映(108分)/15:00トーク&質疑応答(60分)

前売券1,000円(税込) 発売中! 当日券:一般1,500円/高校生以下500円

UNHCR(国連難民高等弁務官) UNHCR 難民映画祭2012 正式招待作品
2012年度日本撮影監督協会賞(JSC賞)受賞

主催 『オロ』上映実行委員会／オロ製作委員会　託児サービスあり 有料。詳細はお問合せください。narinari333@gmail.com

問合せ先 上映実行委員会 090-4047-1441 大石／080-5224-5524 日下／0224-76-2015 太田／製作委員会 080-5407-8739 代島(ダイシマ)

会場 えずこホール 仙南芸術文化センター「平土間ホール」宮城県柴田郡大河原町字小島1-1 TEL 0224-52-3004 http://www.ezuko.com/